

日本経営分析学会 2016 年度「森脇賞」

受賞対象：

坂上 学『事象アプローチによる会計ディスクロージャーの拡張』
(中央経済社、2016 年 3 月 29 日発行、304 頁)

受賞日：2016 年 10 月 22 日（日本経営分析学会第 32 回秋季大会）

研究内容：

本研究は、George H. Sorter が 1969 年に公表した論文「An Events Approach to Basic Accounting Theory」を嚆矢とする「事象アプローチ」による会計ディスクロージャーの実現について検討をおこなったものである。

現在の会計ディスクロージャーは、企業のおこなった経済事象を経営者の視点から集約し、それを財務諸表というかたちで提供している。経済事象を集約するにあたって、多数の代替的方法が認められており、その組み合わせによって最終的な利益は無数のバリエーションが存在する。しかも情報利用者にとって最適な形で集約されているとは限らないため、十分なディスクロージャーがなされているとは言い難いものであった。情報利用者の意思決定にとって最適な形で会計情報を集約するためには、集約そのものを情報利用者に委ね、「生のデータ」である会計事象そのものを開示してはどうか、という考え方が事象アプローチである。

この事象アプローチによる会計ディスクロージャーを実現するためには、企業の経済事象をどのように把握し、それを一定のデータモデルに落とし込むかという会計データモデルの議論と、蓄積された会計事象をどのように伝達し、またそれをどのように集約するかという電子開示の議論について、包括的に議論をしている。会計データモデルの議論においては、階層モデル、網モデル、関係モデル、オブジェクト指向モデルといった展開と、概念モデリングにおいて用いられる実体関連モデルと、その応用として REA 会計モデルを取り上げ詳細な検討をおこなっている。電子開示の議論においては、米国 SEC による EDGAR システム、日本の金融庁による EDINET システムの展開を回顧しつつ、最新の XBRL (eXtensible Business Reporting Language) の技術を応用することで、事象アプローチによる会計ディスクロージャーの実現可能性を明らかにした。

なお本著書は、本学のイノベーション・マネジメント研究センターの出版助成を受け、イノベーション・マネジメント研究センター叢書の 1 つとして刊行されたものであることをここに記して感謝を申し上げたい。